板門店（판문점）を見てきて

外国語学部　国際文化交流学科３年　望月大輝

今年９月16日、私たちは「板門店」に行ってきました。板門店とは、北緯38度線の軍事境界線上にあり、国連軍と朝鮮人民軍がお互いに監視し合っている場所です。この場所で朝鮮戦争における北側の朝鮮人民軍と南側の国連軍の停戦条約が１９５３年に調印され、同年10月以降は両国間の停戦を監視する「中立国監視委員会」と「軍事停戦委員会」の本会議場が設置され、停戦協定遵守の監視が行われているのです。この目で北朝鮮をじっくりと眺めることができ、北朝鮮の兵士も間近で見ることができました。板門店には、ソウルからバスに乗り、ツアーでしか行くことができず、韓国人が行こうとすれば、２、３か月前から申請しないと行くことができない特別な場所です。

ソウルからバスで移動しているとき、川の向こうに見える北朝鮮

北朝鮮と日本は国交がないため、旅行に行くことは難しいです。よって私たち日本人にとって北朝鮮は謎に包まれた国であり、テレビで放送されている北朝鮮の映像は貴重なものです。このようなことから今回の板門店への訪問は、本当に価値あるものでした。

日本から韓国に旅行に行く人はたくさんおり、韓国のドラマや音楽は今日本でかなりの人気があります。それらがきっかけで韓国に興味を持ち旅行に行く人や、韓国料理や買い物をするために行く人のように日本人旅行者は様々です。韓国は、日本から近く物価も安いですし、海外旅行にはよく適している国であることは間違いありません。しかし、そうやって韓国での旅行を楽しむ私たち日本人が忘れがちなのは、朝鮮戦争がまだ終結していないということです。したがって韓国の男性たちは、軍隊に行くことが義務付けられており、町を歩いていれば軍服を着た男性を見かけることが多いです。朝鮮半島は休戦線によって北と南に分断されており、今もなお緊張感に包まれているのです。

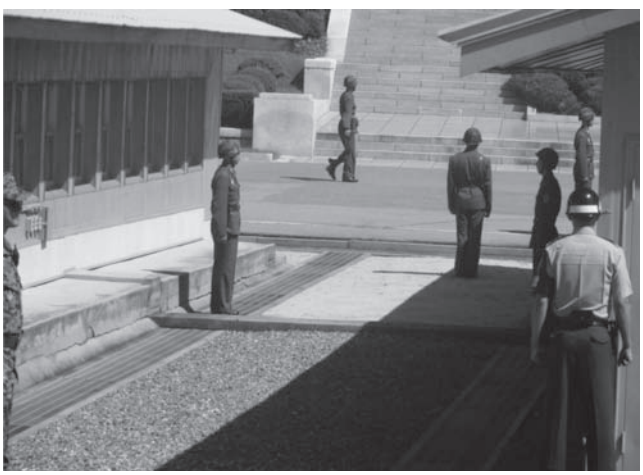
そういった意味で板門店ツアーは特別であり、参加するにあたっていくつか決まりがあります。ツアー当日はパスポートを持参することが義務付けられており、共同警備区域（ＪＳＡ）

内に入る前は、韓国の兵士によってパスポートの確認が行われます。

服装も制限されています。サンダルや資本主義の象徴とされるジーンズは禁止され、襟付きのシャツを着ていかなければいけません。もし決まりに従っていない服装をしていたならば着替えるか、参加はできなくなります。サンダルを履いてきてしまった人のためにスニーカーが準備されているほどです。

国連バス内で、ガイドさんの合図とともにバスから写真を撮り始める日本人ツアー客

また、写真撮影にも制限があります。ツアーにはバス一台につきガイドさんが一人帯同してくれるのですが、そのガイドさんの合図に従って写真をとることができます。よって、写真をとってもかまいませんといった合図がない以上、写真撮影は禁止です。ここで写真を撮ることはとても貴重なので、合図が出た瞬間ツアーの人たちはいっせいに写真を撮り始めます。



国境線の向こう側で構えている北朝鮮の兵士

次に、北朝鮮の兵士に対しては手を振ってはいけないということです。手を振るといったことだけではなく、指をさすことも禁止されています。例えば、同行していたメンバーに国境線を挟んでやや遠くに見える北朝鮮の兵士を見て、「ほら、あそこだよ」といった行為は一切禁止されているのです。また、北朝鮮の兵士に向かって手を振るといった行為も、北朝鮮と同じ共産主義者だとみられるため禁止されているそうです。

このように、板門店ツアーには決まりごとがたくさんあります。それだけ緊張感に包まれているということです。共同警備区域に入ってから、韓国の兵士が運転する国連のバスに乗り換え、ツアー客である私たちを万が一の時に身を呈して守ってくれる韓国の兵士が同乗してくれます。その兵士は、軍服をきちんと着こなし、視線を隠すサングラスも着用しており、とてつもない存在感を放っています。万が一の場合はこの兵士が私たちを守ってくれることになっていますが、私たちの命は必ずしも保証されているわけではありません。極端に言えば、死を覚悟してツアーに臨まなければならないのです。

また、共同警備区域内に入る前にバスで行くところや、区域内でいくつか注目すべき場所があるので、紹介していきたいと思います。

まず一つ目は、「臨津閣」（イムジンカク）です。ここは1953年7月27日、休戦協定締結後12，773名の捕虜がこの橋を渡り、完全に自由の身になったことから「自由の橋」と呼ばれています。

左側の灰色の軍服を着た兵士がバスに同行してくれる。ツアー中は無線で連絡を取り、今どこにいるか、ツアーが決められた過程通り行われるかを確認する

今は北と南を行き交うことのない線路と鉄橋

自由の身になった捕虜を北朝鮮から運んできた汽車

北朝鮮にいる離れ離れになった家族に思いを書いた短冊がたくさん飾られている

２つ目は、「ポプラ事件の切り株」です。１９７６年８月18日に、大きくなりすぎたポプラの木を国連軍が切っているときにアメリカ兵の二人が北朝鮮の兵士二人に殺され、殴り合いになり、国連軍と朝鮮人民軍の兵士がそれぞれ４人の計８人が負傷したという事件が起きました。その事件が発生した場所が一つのポイントとされています。

ポプラの事件の切り株

三つ目は帰らざる橋です。１９５３年７月27日に休戦協定が調印されてから南と北の捕虜を交換した橋です。一度方向を決めてからこの橋を渡った捕虜は二度と帰れなかったことから帰らざる橋と名付けられました。映画ＪＳＡで何度も登場した。

帰らざる橋

軍事停戦委員会本会議場

4つ目は「軍事停戦委員会の本会議場」です。テーブルの中央を通過する軍事境界線（マイクの線）を境に国連側と共産側が向き合い、軍事停戦委員会の会談が開催されるところです。窓越しに北朝鮮の兵士が立っており、一番間近で見られるところです。

これまで、板門店ツアーについて書いてきましたが、参加すれば考えさせられることが非常に多い価値のあるツアーであることは間違いありません。38度線によって、離れ離れになった家族が遠くにいるわけでもないのに会えず、同じ民族でありながらもその時が来れば戦わなければいけないのが今の韓国と北朝鮮です。もしこの平和な日本が今、朝鮮半島のように分断されていたら、境界線の向こうの国を私たちはどう思っているでしょうか。同じ言葉を話すのに向こう側は敵なのです。

先日、北朝鮮の韓国への砲撃の事件で朝鮮半島情勢がまた緊迫化されました。よって、私たち日本人も、朝鮮戦争はまだ終わっていないのだと再認識させられました。朝鮮半島が今のように分断化されているのは日本の責任でもありますし、けっして他人ごとではなく、私たちが南北統一のために何もできなくても、朝鮮半島で昔どんなことが起きて今どういう状況なのか、一人ひとりが事実を知っていく必要があると思います。そのためにもこの板門店ツアーに参加することはその手の一つだと思います。